

アンザイレン

高橋玄洋

放送日 昭和36年8月13日
番組名 サンデー劇場
（日本電気、新日本電気）
制作 NETテレビ
演出 河野 宏
音楽 木下 忠司

登場人物

矢代 喬平 相馬 剛三
大仲 慎吾 丹羽 研二
警備隊 A 青木 義朗
 B 浅香 春彦
管理人・中村 西沢 由郎
学生OB・
リーダー 森山周一郎
学生 A 蜷川 幸雄
 B 川野 孝司
 C 橋口 博
三 島 武藤 英司

南稜山岳会A

夏子 B

服部 哲治

河合 伸旺

真中 陽子

岡本佳津子

堀 みどり

深川きよ子

特別出演

雲稜山岳会 南 博人

藤 芳康

石塚 俣男

ザイルで互の体を結び合い
相互確保に備えることを
アンザイレンと言い
結び合う行為を
アンザイレンすると呼ぶ。

1 夜明けである

山の家はまだ眠っている。

明け方の裸電球は間が抜けている。

屋根裏の窓に朝靄もやが走っている。

電気機関車の警笛がトンネルの中へ吸込まれる。

腕がのびて時計を見る。五時二分だ。

耀

やがてマツチの輝き——紫煙が上る。

一段ともの凄いイビキにピヨコンと起き上ったBG（夏子）、隣の品子をゆり起す。

夏子 晴れたわよ。いいお天気よ。

品子 えッ……ホント！

夏子 行こッ。（顔を洗う真似）

品子 ン！

はずんだ二人の乙女はタオルを探し出す。

品子 凄かったわネ。

夏子 女性の恥ね。

品子 ねえ！

夏子 起す？

品子 いいわよ、もう少し寝かしとこ。

夏子 起きたら起きたで又オキナリ轉マユるから……。

二人、首をすくめて笑う。

鼾の主、玉子いい気分で眠っている。

大学生も眠っている。

OBのリーダーも眠っている。

チロル帽も眠っている。

たわいなく口を開けてる高校生。

ハンチングベレーを顔に載せた男。

その肩口から腰にかけて、ザック、ザイル、カラビナ付の補助ザイル、ハンマー、

ハーケンの束等がみごとに整理されている。

その足元を忍び足の二人がゆく。

お早よう。

品子 オ、オハヨウ……。

夏子 ……ごさいます。

のまれた二人、どきまぎして階段を降りて行く。

笑って見送る大仲慎吾。

隣のハンチングベレーが顔を覗かせる。山のベテラン矢代喬平である。

矢代 寝といた方がいいぞ。

慎吾 五時の新潟行き、もう行きましたよ。

矢代 そうか……。凄いいんだナ。

慎吾 ……？

矢代 慎吾ンチの姉さんもあかい？

慎吾 まさか、……。でも、判んないな、あん畜生も……。女って案外判りませんからね。

矢代 いやに荒れるじゃないか。

慎吾 巻き上げ損なつたんですよ、小遣い。……。持ってたんだ案外あれで……。ケチッ！

矢代 フフ、ケチか……。 (又帽子を載せる) 横向いて寝りゃいいんだ、横向いて……。

慎吾 何がです？

矢代 鼾さ、上向いてるから鼾かくんだ。

慎吾 どうだか……。喰物匂わせると効くんですよ。鼻が通って……。

矢代 どうだろう。

矢代、信用しない呈で、首をねじり横にむく。慎吾も煙草をねじる。

2 山の家を表

入口近く「山の鐘」が釣ってある。

夏子と品子、そっと扉を開けて出て来る。

品子 ワア、いい気持ち！

夏子 これが山ね。

品子 山はこれからよ。

夏子 (胸を抱き) この辺がキューツときちやう。オゾンが充満してるのね。

品子 オーバーね。

夏子 谷川岳の黎明よ。オゾンよ。銀座のネオンを吹つとばせっだわ。

品子 オーバーよ。

二人、手を取り合ってクルクル廻り、小川へ駆け下りてゆく。

と、その小川の向うを夜行で着いた連中が朝靄について登って来るのが見える。

その唄声――

〽登ろよ あの尾根 谷川岳に

鍛えたこの脚試そじゃないか

われら若人 ザツクをしよえば

雲は飛ぶ とぶ こだまが笑う

雨よ嵐よ 何のその

そこに山があるからさ

〽登ろよ あの岩 谷川岳に

鍛えたこの腕試そじゃないか

われら若人 ザイルをひけば

空は青空 ハーケン唄う

オーバーハングよ 何のその
そこに山があるからさ

〽登るよ あの沢 谷川岳に
鍛えた心試そじゃないか
われら若人 雪溪踏めば
友の墓標に アイゼンが泣く
吹雪クレパス 何のその
そこに山があるからさ

3 小川の辺り

若人の一団は歌いながら小川を通り、山の家へ登って行く。

青年 お早よう！

娘達 お早ようございます。

青年 お先に！

娘達 どうぞ。

立上って見送る娘達。

4 山の家を表

若人の一団、登って来る。

窓から顔を出すもの、テラスへ出る者。

誰か鐘を叩き、内も外も和して歌う。

寝巻姿の管理人夫婦も出て来る。

若者達、握手を求める。

青年 お世話になります。

〃 今年もよろしく……。

管理人 やあ、どうも……。

〃 お久しう。

夏子達も帰って来る。

一同、小屋へ吸込まれる。

5 山の家の上階

矢代と慎吾、メイファーズと云う感じで起き上る。

夏子と品子、上って来る。

夏子 玉子！ 起きなさいよ。玉子！

玉子 ど、どうしたの？

品子 インデアンの襲来よ！

玉子 インデアン?! (あわてて襟を合せる)

テラスから戻って来た連中が笑い、インディアンの狂声をあげて又笑う。

6 山の家から見える「山」のたたずまい

7 山の家一階土間

テーブルに寄って朝弁当を拵げる一団。
懐しそうに見廻す者。

青年1 小母さん、お茶頼みます。

小母さん ハイ、只今。

青年2 (隣の女の子に) 焼イモじゃなかったのか？

女の子 当りでしょ。ねえ。

青年3 頭え来ちゃうよ。お袋の奴、何時までも俺が子供だと思ってるんだから……食べるか！

女の子にグリコを投げる。

青年1 子供だって育つよな、年が経ちや……頭は別だけどさ。

青年3 こいつ！

学生達のOB、通りかかる。

O B 何処へ行くの？

青年1 ガレ沢から西黒尾根を通って肩の小屋、天神峠と廻るつもりです。

青年2 何しろ、女子供が多いもんですから……。

女の子 まあッ、誘ったの誰さ。

青年1 天気が好ければ一ノ倉岳まで足を延ばします。

青年2 何しろケールブルカーに乗りたくって来たって云うのが……。

女の子、あわてて口をおそう。

女の子 シツッコイわね。この子！

O B 無理せんことだよ。無理だけは。

管理人中村、お茶を運んで来る。

学生——ビッコをひいて来る。

学生1 先輩。

O B どうしたい？

学生1 股モモの筋肉が痛くって……。

O B 馬鹿野郎、あれ位いのことでアゴを出しててどうする。谷川なんぞ、登山のゲレンドエだぞ。運動場で痛い痛いなんて云つとる様じゃ、本場のアルプスに行ったらどうする。(時計を見て) さあ、朝の体操だ。表へ集合！

学生1 ハイイ(クサル)おい、表へ集合！

学生達、表へ去る。

青年1 この頃天気はどう？

中村 ここ二、三日持ってますがね、さあ、日に七度は変わる処だからね……。 (お茶を配って去る)

女の子 一応は通ぶつうぶってみなきやね。

青年1 リーダーは神経使うさ。

別のテーブルで矢代と慎吾が荷物の点検をしている。
横に夏子と品子、パンを食べている。

中村 (お茶を置いて) 今度は何処です？

矢代 有難う。一ノ倉の衝立岩。

中村 烏帽子ですか。(慎吾に) 大変ですな。

慎吾 ええ。

矢代 近頃、誰か登りましたか？

中村 聞かないよ、第六ルンゼは……。

慎吾 じゃ、大分変ってるかも知れないね。

中村 大仲さんも見えるたびに変ってる。

慎吾 どう？

中村 もう立派なベテランです。

矢代 おい、慎吾ツチ、おごりだな。……ハーケンよく見といて呉れよ。

中村 大仲さんが初めて見えたのは大学へ入った年でしたね。

矢代 こんな筈じゃなかったよ。慎吾ツチが大学受けるんで家庭教師に行ったのがこの僕なんだからね。

中村 何を教えたんです。矢代さん。

矢代 勿論英語や数学さ。……山登りなんぞ教えた覚えはないよ。それが知らぬ間に山岳部なんぞへ入って。

慎吾 矢代さんが悪いんですよ。兎に角、感化したんだから。

中村 そうですよ。

矢代 何言ってやがる。家庭教師の涙ぐましき努力も忘れて……。

中村 ハハ、そうだ、矢代さん達にお願いしよう。

中村、台所へ去る。

矢代 このザイルも大分毛羽立って来たな。

夏子と品子。

品子 これおいしいわよ、食べる？

夏子 ええ。

箸と箸が合う。

品子 駄目よ！ 箸から箸へ渡すのは骨を拾う時だけよ、縁起でもない。

矢代も慎吾も声の方を見る。

夏子 (矢代達に) 済みません。

中村、花束を持って戻って来る。

中村 この間、根木さんのお母さんが見えましてね、どなたか登られる人があったらつて……。

矢代 そう、お母さんいらしたの。会いたかったな。

中村 随分白髪が増えてねえ、矢代さんの噂も出ましたよ。

慎吾 北稜山岳会の根木さん？

矢代 うん。パーティーは別だったが僕はあの人の打ち込んだハーケンを何度か使わして貰ったことがある。そのお札に祖師ヶ谷のお宅へうかがったら、とても喜こんで呉れてね……あれが最初の最後だった。

中村 いい人でした。笑うと鬼歯が出て……。

矢代 (花束を持って) 確かに……それじゃ行こうか。
慎吾 ええ、(時計を見る) 六時十分。

玉子 玉子がやって来る。

慎吾 御免あそばせ。

慎吾 どうぞ。(と矢代と顔を見合せて立つ)

中村 では、お願いします。

矢代 行って来ます。

中村 お気を付けて！

慎吾 (夏子達に) お先に！

二人、そのまま出て行く。

乙女達、見送る。

夏子 小父さん、今の人達本当の登山家？

中村 本当って、山登りを職業にしてる人は居らんけど、青雲山岳会の矢代喬平、大仲

慎吾って初登攀を何度もやってる人ですよ。

品子 一ノ倉沢の第六ルンゼって云ってたわね。

品子達、壁の谷川岳概念図を見に行く。

地図の上を旧道にそって品子の指が登って行く。

一ノ倉沢出合い。

8 一ノ倉沢出合附近

湯檜曾川を見下ろす旧道を矢代と慎吾が黙々と上って来る。

角を曲ると二人の脚が止まる。

見上げる二人。

矢代 うむ、又来たな。

慎吾 来ましたね。

そこに、意外に近く、一ノ倉の岩壁が視野一杯に峻巖殺伐な姿をおおいかぶせている。

矢代 休もうか。

慎吾 七時八分。

二人、岩に腰をおろして煙草を出す。

ウグイスが鳴いている。

慎吾 先刻から何を考えてるんです。

矢代 いや別に……根木さんの家へ行った時(この、花束を指し)お母さんが「一体何のために危い山登りなんかするんでしょうね」って笑ってたのを思い出したんだ。

慎吾 世間じゃ大抵そう言いますね。……救えん奴だ……。

矢代 「そりやお母さんが山を知らないからですよ」って二人して笑ったんだが、その一人はもうあの絶壁から落ちて死んでる。

慎吾 もう一人は、又しよう懲りもなく登ろうとしてる……。

矢代 確かに山を知らなきゃ山で死ぬことはないんだ……。慎吾ツチなんかどうなんだい？ 何故山に登るんだい？

慎 吾 “そこに山があるからだ”じゃ駄目ですか。

矢 代 だから、そこに山があればどうして登るんだ。

慎 吾 最初に山へ登る動機は、皆違うと思うんです。人に誘われて何となくとか、失恋したとか、都会の生活の息抜きとか……。

矢 代 そうやって一度登ると、又登ってみたくなくなる。もう一度登ると又もう一度来たくなる……矢つ張り山に何かあるからか、それとも、人間にいんどんでみたい何かがあるのか。

慎 吾 エネルギーですよ、人間の……。

矢 代 エネルギーね。

慎 吾 実際僕なんかハケ口がなくなつて、イライラして来る時がありますからね。

矢 代 今は赤線も無いし、か。

慎 吾 肉体的にもですが、むしろ精神的なエネルギーのハケ口が無さすぎるんですよ。

今の日本には……。

矢 代 そうかも知れんな。

慎 吾 矢代さんはどうなんです？

矢 代 俺か？ 俺の場合は何と云つたらいいのかな、自分自身に対する一種の義務みたいなものを感じるんだ。

慎 吾 義務？

矢 代 義務と言って悪ければ、生活と言うものかな。慎吾ツチなんかも、もう二、三年サラリーマンを経験すると思つたと思うんだが、気がついてみると、何時の間にか自分自

身、決められた一本のレールの上を走ってるんだ。考えることも、行動も、運命も、何も彼もが決められた通りに走ってるだけだ。つまり自分が生きてンじゃないんだ。ただレールの上を運ばれてるだけなんだ。そりゃ安心もしていられるけど、やり切れないことだよ。

慎 吾 僕のイライラみたいなもんですね。

矢 代 たまらなくそのレールから脱線したくなる。脱線することが人間の生活を見出すことだし、自分自身への義務みたいな気がするんだ。

慎 吾 山がつまりその脱線なんですね。

矢 代 少くとも岩壁を攀じ登ってる時だけは、足場一つ選ぶにしても自分自身で選ばなきゃならんし、その行動が俺の運命を決めてるわけだ。俺が足場の選択をあやまれば、俺が谷底へ落ちなきゃならん……そうだろ？

慎 吾 ええ。

矢 代 こうやって、二人で登ってる時だつて、相手を信頼するかどうかは俺自身の判断で決められる。

慎 吾 大仲慎吾は、矢代さんに今現在信頼されてると言うわけですか。

矢 代 でなきゃ命綱は渡せんさ。

慎 吾 アンザイレンって人間同士の大変なことですかからね。

矢 代 そうだとも。

二人、顔を見合せて立ち上る。

慎 吾 (時計を見る) 七時十三分。

又黙々と歩いて行く二人。

9 一ノ倉沢の各壁面

10 中央稜

豆粒の様な二人が上つて来る。

(OL)

11 中央稜

二人、上つて来て止る。

汗を拭く呼吸が大大大きくなっている。

見下ろす谷の深さ。雪溪のクレパス。

見上げる衝立岩の高さ、きびしさ。

矢代 アンザイレンしよう。

慎吾 もうですか。

矢代 これから先にはゆっくり休めるテラスはないんだ。

慎吾、ザイルを出して、準備にかかる。

矢代 この下辺りだ、根木さんが落ちたのは……。

矢代、力一杯花束を投げ、慎吾も立上つて二人黙禱する。

慎吾 僕も読みました。(準備しながら) 一の倉南稜を登攀中、三人のうち誰かが新雪のためスリップしたらしくて、烏帽子奥壁上部から一気に烏帽子スラブまで墜落死亡し

たと言うんですね。勿論アンザイレンしてたんでしようが……。

矢代 直接の原因は確保の失敗だろう。だが問題はハーケンが一本折れ、一本抜けてザイルを通したまま落ちていたことだよ。

慎吾 余程スリップのショックが大きかったと言うことですね。

矢代 ショックが大きかったことは事実だろうさ。ハーケンが一本折れることでもそれは判る。しかし、もう一本抜けたと言うのはどうしたことだ。先頭はリーダーの根木さんに決っている。ならハーケンは彼が打込んだんだ。彼の打込んだハーケンをコップ状岩壁やその他で何辺も使わして貰った俺には、彼が少々のショックで抜けるような打込み方をするなんて考えられんのだ。

慎吾 しかし、事実抜けちゃったんだから……矢張り打込み方が甘かったんでしよう。

矢代 慎吾、ハーケンが甘かったで済むと思うか！

慎吾 ……？

矢代 俺達は、一本のハーケンに命を託すんだぞ。ハーケン一本で尊い命を一つと言わず二つでも三つでも落すことだってあるんだぞ！

慎吾 (矢代の剣幕に呆気にとられ) 矢代さん！

矢代 一つだけ思い当ることがある。それは、俺が根木さんの残していったハーケンを使わして貰ったように、根木さんも誰かが残していったハーケンを使ったんだ。そのハーケンがナマクラだったんだ。

慎吾 しかし一応はハンマーで検してみるものでしよう。そう云う場合には……。

矢代 それはやったろう。ただ、人を信頼していれば、その勘は狂うことだってあるだ

ろうき。

慎 吾 矢代さん、そのハーケンが矢代さんの打込んだものだって言うんですか。

矢 代 判らん、判らんが、ただ……。

慎 吾 矢代さん！ それは僕が一番知っています。矢代さんのハーケンがそんなに甘いなんて……そんな筈はありません。……僕が知っています。

矢 代 慎吾ツチ、そう言って呉れる気持は有難い。だが……事実……。

慎 吾 だがもへちまも、今までに一度だって矢代さんのハーケンが利いてなかったことがありましたか？

矢 代 ま、落着いて聞いて呉れ。あの時……祖師ヶ谷のお宅へうかがった時に、根本さんからこのルンゼの秋の初登攀を試みるんだと言う話が出た。俺は以前に登攀を試みて失敗し、途中から引返した話をして、色々ルトの相談にも乗った。根本さんは、今度は「逆にあなたのハーケンを僕が借りることになりますね」って言うから「どうぞ」って笑ったんだ。

風が寥々りようりょうと二人を吹き抜けてゆく。

慎 吾 だからと言って未だ……（気付いて）そうか、そのハーケンを検べに行きたいんですね。矢代さん……今から……。

矢 代 （うなづく）慎吾、お前の自由意志で決めて呉れ。今度の登攀は俺の勝手な願いだ、無理には言えん。

慎 吾 何を言うんです、もうアンザイレン出来ましたよ。

矢 代 済まん。早く言えばよかったんだが……。

慎 吾 矢代さんでなかったら、恐らくこんなことハーケンを確認するまで、いや一生

誰にも言わないでしょうね。（と、キャラメルを渡す）

矢 代 （苦笑する）

慎 吾 行きましよう。（時計を見て）九時三十分。今日は目的のある登攀ですね。

二人、アンザイレンを確め合うと黙って歩き出す。

その行手に大スラブーーそして烏帽子岩。

12 大衝立岩をよじ登る二人

次々と高等技術が駆使され、みごとなチームワークプレイが続く。

青空にハーケンが唄う。

ギラギラした真夏の太陽。

矢 代 あと何米？

慎 吾 あと五米！

矢 代 よーしッ。

テラスで確保し、矢代を見上げる慎吾。

その眼に直ぐ近く、リスに打込まれた古いハーケンが写る。

リスを探して苦闘する矢代。

慎 吾 矢代さん！ リスが見付らないんですか？……。昔のハーケン使って下さい。矢代さん！ 昔のハーケンを！

歯をくいしばって懸命の努力を続ける矢代。

「登るよ。あの岩。谷川岳に
鍛えたこの腕試そじゃないか
われら若人。ザイルをひけば
空は青空。ハーケン唄う
オーバーハングよ。何のその
そこに山があるからさ」

13 テラス

岩の一角に、サグリの手が延び、やがて矢代の姿が現れる。そして怖いようにふり
仰ぐ。

14 スラブに残った三本のハーケン

15 テラス

矢代 うん、あった！ 一本、二本、三本、確かに残ってる。……俺のハーケンじゃな
かった！

矢代 汗を拭き、直ぐにビレーを探してザイルをかけ、確保の構えをとる。

慎吾 ようし、行くぞ！
ザックを背負った慎吾が登り始める。

慎重にザイルを手繰る矢代。

矢代 右々！ その足場気を付ける！……そうだ。

一歩々々、足場をかためて懸命に登る慎吾。

見下ろす下は千尋のルンゼが雪溪の中に吸込まれている。

矢代、ちらりと四方の峯々を見る。

16 一ノ倉沢の各壁面にいつか雲がかかっている

17 テラス

警戒の眼を光らせる矢代。しかし、慎吾を急がせることは尚危険だ。

18 みるみる峯々をかくしてゆく雲

19 テラス

いらいらする矢代。

岩の一角に慎吾の手がかかり姿を現す。

慎吾 一寸したもんだなあ。

矢代 慎吾ツチ、見ろよ！

慎吾 畜生、来やがったか。

20 全く雲に閉された峯々

21 テラス

矢代 仕方ない、下りよう！

慎吾 でも、矢代さん。

矢代 いいんだ。……見て呉れよ、あそこに三本残っている。

慎吾 そうですか。(歓喜し、握手を求める)

矢代 有難う。……だからいいんだ。根木さんはもう少し先まで行ったんだ。

慎吾 そうですね。左の肩に、ハーケンが残ってますよ、少くともあの地点までは進んだんだ。……来てよかったですね。

矢代 うむ。俺は、ここまで自分の負けを確認するために上って来たんだ。

慎吾 負けを確認？

矢代 根木さんが遭難してから何度それを願ったか知れん。いや願わない時がなかった位いだ。谷川岳で未だ誰も成功していないのはこのコースだけだ。俺が失敗し、根木さんが遭難した。人間なんてチツポケな考えを持つもので、口ではえらそうなことを云いながら俺は根木さんに負けたくなかった。彼が何処まで登って遭難したか、それが知りたかった。……もしや、俺の打込んだハーケンが抜けて彼等が遭難したんじゃないかと気が付くまではな。しかし、それに気が付いてみると、自分の小っぱけな心が恥かしくて仕方なかった。人の命を奪ってまで初登攀に成功して、それが一体何だと言うんだ。そうだろう？……それからは根木さん達が、俺の失敗を足場に、はるかに高く登って呉

れてることを願うようになった。自分の負けを確認したかった。そうして、根木さん達の足跡を、報告するのは俺に課せられた義務だと考えたんだ。

慎吾 判りますよその気持。矢代さんらしい考え方だ。

矢代 もう一度出直そう。そして根木さん達の志を吾々の手で果そうじゃないか。

慎吾 (決意をこめて肯く) ……残念だなあ、しかし折角ここまで来て……。

矢代 登山に未練は禁物さ。……早い方がいいぞ。(空を見廻す)

慎吾 (も見上げて) ようし、覚えていろ。

二人、下りる用意にとりかかる。

22 大衡立岩を下りてゆく二人(懸垂下降)

23 落石

24 遭難

25 テラス

ハーケンに掛けられたカナビラがきしみ、ザイルがピンと張ったまま移動する。
△暫く――▽

岩に手がかかり、傷ついた矢代が上って来る。

慎吾 矢代さん！ 頑張ってください。矢代さん！

泣かんばかりに叫びながら自己確保し、ザイルをたぐる慎吾。
矢代の手もようやく岩に着く。

抱く様にしてかかえ上げた矢代はかなりの重傷である。

慎吾 矢、矢代さん！

矢代 だ、大丈夫だ。

慎吾 何処を打ったんです?!

矢代 大腿骨を折ったらしい。

応急手当をする慎吾の手からも血が流れている。

慎吾 畜生ッ！

慎吾、シャツの袖を破り、副木を当ててしぼる。

慎吾 痛いですか。頑張ってください。

矢代 大丈夫だ。……済まん。

慎吾 済みません、僕がもう少し早く確保出来たら……。

矢代 何を言うか。災難さ、よくあそこで喰い止められたもんだ。見ろ、その手を。

慎吾 僕なら大丈夫です。

矢代 よく調べるよ。気が付かずに放っておくと後で大変なことになるぞ。

慎吾 大丈夫です。それより矢代さん……。

矢代 うむ、……今日はウイークデーだから何処にも登つたらん様だな。

慎吾 ヤッホー！ ヤッホー！

コダマが返るだけ。

慎吾 オーイッ、答えてくれ！……オーイ！ ヤッホー！

コダマだけが戻って来る。

間――

顔を見合わせる二人。

矢代 慎吾ッち、今何時だ。

慎吾 三時二十分。

矢代 じゃ、直ぐに出発すれば、暮れるまでにはたどりつけるな。

慎吾 矢代さん、その脚で下りられますか。

矢代 俺は無理さ。

慎吾 じゃ、僕だけ下れって言ってますか、矢代さん放ったらかして……。

矢代 放ったらかしてじゃない、遭難を知らせに行くんだ。

慎吾 同じことじゃないですか。僕は嫌だ！

矢代 仕方がないじゃないか。そうするより……。

慎吾 嫌です。ここへ残って看病します。

矢代 慎吾ッち。いいか、今夜俺達が帰らなくなったら、誰も不思議には思わんだ。途

中でビバークしてるとしか考えんのだ。そうだろ？ お前が行かなかつたら誰がこの遭

難を知らせるんだ。頼む、御苦労だが行って呉れ。

慎吾 嘘だ！ 矢代さんは僕だけでも助けようと思ってるんだ。それぐらい判ります。

矢代 それもあるさ。何も二人こんな処でやられることはない。動ける者は少しでも安

全な処へ退避させるのがリーダーの務めだ。

慎 吾 それなら……。

矢 代 まあ聞け。俺だって助かりたいんだ。こんな処で何時来るか判らん登山者を待つてるより、お前の連絡で救援隊に来て欲しいんだ。

慎 吾 (矢代の顔をのぞいて真意を確かめようとする) 本当ですね。

矢 代 慎吾ツチ、そんな顔するなよ。俺達はどんな時でも笑っていようじゃないか。

慎 吾 そんな笑い顔、ウソだ。

矢 代 ウソでもいい、笑っていよう。その笑いが道を見付け出すこともあるんだ。……さ、俺をこの岩にビバークして呉れ、……さ早く。

慎 吾 ……。

矢 代 軒の先生達も今頃この天気であわててるぞ。

慎 吾 矢代さん！

矢 代 頼む。

慎 吾 ハ、ハイ。

矢 代 (胸のポケットから封筒を出し) それから、これは、お前のケチ姉さんから預かって来たお前の小遣いだ。夜露にぬらすことはないからな。

慎 吾 ……嫌だ！ 矢代さんずるい。……やっぱりここで一人死ぬ気なんだ！ 遠く雷が聞こえて来る。

26 夜のとぼりが降りている

裸電球に山の蛾が戯れている。

ストーブの残り火。

山の家(土間)には誰も居ない。

二階から玉子が寝呆け眼で下りて来てトイレへ行きかける。

ギイツと扉の開く音に――

玉 子 (恐怖して) だ、誰か！

慎 吾、土間にぼったり倒れる。

慎 吾 (荒い息の下で) 小父さん！

奥から中村夫人、出て来る。

二階からも学生達下りて来る。

中村夫人 大仲さん、どうしなすった！

慎 吾 矢、矢代さんが中央稜で……。

夫人 中央稜で……どうしたんです？……あんた！ あんた！

慎 吾 骨折です。大腿骨を……落石をよけようとしてバランス失って……。

夫人 じゃ未だ大丈夫なのね？

慎 吾 救援隊を、直ぐに救援隊をお願いします。

夫人 誰か水を……。

夏 子 ハイ。(走り去る)

中村、出て来る。

中 村 矢代さんが？ 矢代さんがどうしたって？ 骨折？!

慎 吾 小父さん、救援隊を……。

中村 大仲さん、落着いて……場所は中央稜の何処ら辺です？
慎吾 衝立岩の直ぐ下です。テラスにビバークして来ました。

中村 応急処置はして来たね。
慎吾 (うなずいて、水を呑む)

夫人は警備隊へ電話している。

中村 大仲さん、とにかく少し休みなさい。あんたも大分疲れとる。

慎吾 いいえ、僕は救援隊と一緒に……。

学生達、相談していたが、OBが進み出る。

OB 吾々で救助隊を組織しましょう。

三人のパーティも進み出る。

リーダー 南稜山岳会です。参加します。

中村 ま、お待ち下さい。今、警備隊と遭難対策班に電話してますから……。

二、三人、慎吾の回りに集って話を聞いている。

中村 大仲さんを少し休まして上げて下さい。

リーダー 地図を持って来いよ。

中村 (女性達に) さ、もうお引取り下さい。寝とかんと明日こたえますよ。……どうも寝入ばなをお騒がせしました。

OB (学生達に) お前達も二階で待機しとれ、騒いじやいかんぞ。

夫人、慎吾の傍へ寄って、

夫人 矢代さんのお宅、電話ありましたね。

慎吾、黙ってメモ帳を渡す。

夫人 青雲山岳会の方は、誰に連絡します？

慎吾 三島さんにして下さい。それにあります。

南稜の三人とOB、テーブルに地図を拡げて囲む。

慎吾もその中へ入る。

夫人、電話に向う。

柱時計、十時。

27 テラスの矢代

動かない。

風の音だけが――

28 山の家土間

ストーブの燃える音だけが大きい。

地図を囲んで警備隊一名、南稜パーティ二名、OB、中村が無言で坐っている。いらいらして見廻す慎吾。

慎吾 何とか言って下さい。何とか！

警備隊 要は、一人の命が大切か二人以上の命が大切かだ。

OB ……しかし、二重遭難すると誰が決めたんです？ するか、しないかやってみなきゃ解らないじゃないですか。いや恐らくしやしませんよ。

警備隊 しかし、その恐れがある以上は……。

○ B そんなことで、あんた達、山岳警備隊と云えるんですか。

中 村 まあ、まあそう興奮せんと……。

警備隊 だから、夜が明け次第救助に向うと言っています。

慎 吾 それまで矢代さんの体が持つかどうかです。貴方達は遭難した経験がないから……。

南稜 A 大仲君、君は今、矢代さんを救助したい気持で一杯だ。君の立場はよく判る。しかし、登ってくれるのはこの人達でありわれわれだ。

慎 吾 だからこうやってお願いしてるんです。……中村さん、中村さんはどうなんです。

中 村 ……私は明けるのを待つべきだと思うがね。

○ B あんた達地元は死体収容になれているから神経がマヒしちゃってるんだ。問題は今、一ノ倉の第六ルンゼに、ここに一人の立派な登山家の命が危機にさらされているんだぜ。一人の命が……。

南稜 B 矢代さんの傷が絶対的なものかどうかだな、問題は……。

慎 吾 絶対的って?!

南稜 B 今夜のうちに引きおろさなきゃ命にかかわるかどうかだ。

慎 吾 そう判断したからこそ、僕は降りて来たんだ。

南稜 A それは君だけの判断だろ?

慎 吾 僕の判断が違ってるって言うんですか!

南稜 A 骨折だけなら朝でも間に合うと僕は思うね。

警備隊 僕もそう思う。

○ B 傷は持つかも知れん。だが遭難者の心理はそう簡単なものじゃない。ただ最後の時が来るのをじっと待っている男なんて居るもんじゃないよ。今の矢代さんをささえて居るのは、吾々救助隊の到着だけだ。その救助隊が予定の時間になっても現れなかったとしたら、最後の力をふりしぼっても、何とか脱出しようとするだろう。もしそんなことになったら元も子もないじゃないか。

警備隊 救助隊を発見したとたんに安心して気を失った例もありますよ。

中 村 矢代さんは、登山の鉄則は必ず守る人です。決して自分から動いたりはしません。

南稜 A (うなづく)

南稜 B この誘惑に耐えることがどんなに至難なことだか、よく判るさ。だけど、相手は矢代さんだ。

中 村 待ちましよう。大仲さん……もう直ぐ二時です。三時間もすれば夜が明けます。慎吾、がっくりする。

中村夫人、お茶を入れる。

○ B、諦め切れぬ様子で歩き廻る。

○ B この手で何時も殺されるんだ。

警備隊 何だと、もう一度言ってみろ!

中 村 よしなさい。田村さん……。 (引止める)

警備隊 君を救助隊からはずす! そんな精神じゃ二重遭難を引起すだけだ。

○ B ああ別行動でいきましょう。吾々も出動費稼ぎの地元なんかと同一行動はとりた

くない。

警備隊 何だと?!

中村 知切さん、そりや少し言葉が過ぎやしませんか、確かに遭難すれば金はかかるもんです。それが地元で落ちると皆さんおっしゃる。そりや少しは落ちるでしょ。しかし、地元の人間にだって生活ってものがあるんです。その日一日の稼ぎをふって山に登るんだ。それも年に一度や二度なら、喜こんで奉仕も出来ます。一年に何十日ともなれば、その何十日の生活は一体誰が見てくれるっていうんです。皆、その日暮しをしてるんですよ。それもいつ山で倒れるか判らんのだ……それを出勤費稼ぎだなんて……。

O B しかし、果して五十万も百万もかかるものかい?

警備隊 かかる時もある。一万で済む時もある。

南稜 A 止めたまえ、喧嘩するだけの力を救助に振向けて貰おうじゃないか。

南稜 B そうだよ。とにかく、人数としてこの人達も必要なんだ。この際感情論は後廻しだ。

慎吾、顔を上げる。

慎吾 ね、中村さん、僕だけ先に立ちやいけませんか。本谷まで登ってランプで信号するんです。本谷からならきつと見えます。あそこまでならそれ程危険じゃないでしょう。

南稜 A 馬鹿! (慎吾の頬を打つ) 貴様には、矢代さんが貴様を一人下ろした気持ちが判らんのか!

頬を押えて立上る慎吾。

南稜 A 俺には、矢代さんが貴様のことをどんなに期待しているか、判り過ぎる程判るぞ。

矢代さんがお前を無理に下したのは、救助の為なんかじゃない。万一の場合、自分に出来なかった衝立岩の登攀を貴様に継いで貰いたかったからだ。

慎吾、ワツと泣き崩れる。

中村 そうですよ、大仲さん。自重しなくちゃあ。

南稜 B (立上り、ぼそりと) ランプの信号は俺が行こう。

南稜 A (ぼそりと) 頼む。

南稜 B (O Bに) 学生を一人貸してくれるかい?

O B ……(感極まって) 済みませんでした。

O B、いかつい腕で涙を払う。

天井穴から成行きをうかがっていた学生達。

その一人が階段を駆け下りて来る。

学生 先輩、……行かして下さい。

O B (うなづく)

警備隊 (時計を見て) 六時、烏帽子スラブで会いましょう。

南稜 B 六時、烏帽子スラブ、……現在時、二時八分正。

黙々と準備にかかる二人。

29 山の家二階

天井穴からじっと見ている学生達。

寝ている夏子達——しかし、皆天井を睨んで目をパツチリと開けている。

玉子の胸に祈りの手が組まれている。
学生の一人在口笛を吹く。
一同、力づけ合う様にハミングする。
夏子の目から涙が流れる。

30 スラブの矢代

手帳を出して月明りに書きとめている。

——静寂そのものの山——

矢代の声 この遭難の原因は、総てリーダーである余にその責任あり。原因及び、此度登山の目的に関してはパートナー大仲慎吾に聞かれ度し。彼は、突発的事故に当り、懸命な確保に務めると共に最善の応急処置をとり、特に申し残すべきことなし。彼に下山を命じたるは余にして、世間の心なき誤解なきよう特に念の為申し添う。……山は静かに眠り、月明真ヒルの如く、一ノ沢を美事に照し出す。大腿部の痛み次第に増せども、睡魔に耐える方便と心得たり。移動したき誘惑とみにつのれど、ただひたすら登山の鉄則に従うのみ。

31 山の家土間

時計は八時半。

貨物列車が登っていくらしい。

中村 本隊は四時に、出発しました。出合いまでジープを用意しましょう。

矢代の両親が来ている。

母 御迷惑をかけます。

中村 あ、こちら矢張り今の列車で着かれました、青雲山岳会の三島さんです。

三島 三島です。

中村 こちらは大仲さんのお姉さん。

慎吾の姉、小夜子黙礼する。

中村 さ、どうぞお掛けになって下さい。

三島 矢代に限って、こんなことになるうとは……用意周到な奴ですから、……何処でやっただんです？

三島達、地図を覗く。

中村が説明する。

覗こうともしない矢代の母と小夜子。

小夜子 弟だけが助かって……。

母 (静かに首を振る)

二人共、同じ心で互いの目が合う。

ストーブの前で警備隊が無線電話にかじりついている。

警備隊 モシモシ、こちら土合山の家。こちら土合山の家。矢代パーティ救助隊応答どうぞ……矢代パーティ救助隊応答どうぞ！

中村 まだですか。

警備隊 ええ。モシモシ、モシモシ……。

母 ……どうして危い登山なんかするんでしょね。
小夜子 ……。

父 母さん、喬平はここに居るんだそうだよ。

母 いいんです。私は何処に居たって……元気に帰って来てくれれば……。 (泣く)
父 (たしなめて) 母さん。

じつと耐えている小夜子。

警備隊 ……あッモシモシ、こちら土合山の家。ハイハイ……。

一同、その声に緊張する。

警備隊 モシモシ、モシモシ……モシモシ！ (又不通になったらしく首をふる)

32 本谷スラブをかつぎ下ろす救助隊

33 山の家土間

警備隊 もしもし、矢代パーティ救助隊応答どうぞ。……ハイ土合山の家、……えッ無事救出に成功？ モシモシ、無事救出に成功ですね。ハイ、諒解！

三島 お母さん、お父さんお目出度うございます。

母 お父さん！

中村 よかった、よかった。おい (奥へ) 矢代さん助かったぞ。

その声に二階で歓声が湧く。

三島 小夜子さん！

小夜子 (涙を耐えてうなづく)

中村夫人、前掛けで手を拭きながら出て来る。

夫人 お目出度うございます。よかったですねえ。今おいしいオニギリ作ってますからね。

中村 何を言っとるか、馬鹿！

炊き出しを手伝っていた夏子達も飛び出して来る。

玉子も頬ぺたに御飯粒をつけている。

みんな涙を拭きたいがオニギリの手でそれも出来ない。

母 大仲さん。私は、皆知ってますよ。皆んな……喬平と貴女のことも……。

小夜子 えッ？

母 みんな知ってますとも。いくら隠したって貴女の顔にみんな書いてある。全く困った子ですねえ。貴女にこんな心配させて。

小夜子 お母さま。

母 いいのよ、いいのよ、帰って来たら二人でやっつけてやりましょうね。

小夜子、耐えられなく外へ飛び出してゆく。

入れ替りに若者、入って来る。

若者 ジープの用意出来ました。

34 小川の辺り

小夜子、駆けて来ると独り初めて込み上げて来る。

(暫く) ー三島やって来る。

三 島 小夜子さん、ジープで出合いまで行ってやりましょう。

小夜子 (首を振る)

三 島 どうして？ 折角ここまで来たんじゃないやありませんか。

小夜子 あんなに騒がれて帰るんです。一人位い素知らぬ顔で迎えてやらなきや可哀そう
ですもの。

三 島 (小夜子の肩をたたいてやる)

35 一ノ倉沢出合附近

ジープが止り、一同が待ってる向うに救助隊が現われる。

タンカに乗せられた矢代に、慎吾がすっかり寄り添っている。

両親、駆けよって迎える。

毅然として迎える三島。

矢 代 三島さん済みません。

三 島 馬鹿が！

しかし、それで互いにお互いの気持が通じ合っている。

矢代、頭を上げて、山を見る。

慎吾も見る。

そこに厳然とそそり立つ谷川岳一の倉の偉容がある。

矢 代 ようし、必ずもう一度来るぞ。

(終)